

A市内保育所における「気になる子」に関する アンケート調査結果より見えてきたもの

菅原 亜紀

It's concerned with "Children with Difficulties" in A city day care center. The one seen more than a questionnaire survey result

Aki SUGAHARA

I はじめに

保育現場では、「気になる」子どもが増えているという話が聞かれる。筆者が保育士として働いていた十数年の間にも、職員会議や園内研修などで「気になる子」の名前があがり、その子への対応について話し合うという場面が多くあった。そのため、外部から講師を招いての研修や専門家による巡回相談などを要望する保育士が多く、実際に研修会を開く、専門家に巡回相談に来てもらうということが頻繁に行われていた。

保育現場にいれば必ずと言っていいほど耳にする「気になる子」という言葉であるが、「気になる子」とは、具体的にどのような子どもであろうか。藤後（2010）は、気になる子どもとは、「生活面」の問題、「態度や言葉遣い」の問題、「コミュニケーションや社会性」の問題、「問題解決力や対処行動（コーピング）」の問題、「モラル」の問題などを抱えている子どもであると述べている。また、藤井（2012）が実際に保育士に行ったアンケート調査では、フラフラして席に座ってられない、集中力に欠ける、会話ができない・話が聞けない・理解できないなどの「言語・知的関係」。奇声を上げる、自分の感情を抑えられずにすぐ手が出るなどの「感情・コントロール」の面で問題が見られる子どもについて、多くの保育者が「気になる子」と指摘していると述べている。このように、発達のみだけでなく、様々な生活の場面で困難を示す子どもたちや保育士が明らかな障害はないが気になると思っている子どもたちのことを「気になる子」として捉えているのである。

そして、この「気になる子」への対応や、保護者支援、専門機関との連携などが保育現場での急務な課題となっている。筆者が保育現場にいた頃にも「気になる子」についての

受理日 平成 27 年 11 月 30 日

純真短期大学こども学科 助教

対応や、保護者との関わり、専門機関との連携など様々な課題があった。そこで、筆者は平成 25 年に“保育所における「気になる子」支援のためのプログラム一年間行事の視点を取り入れて”という支援プログラムを作成し、佐賀県内 A 市の全保育所に配布させていただいた。このプログラムは発達障害と呼ばれる子どもや、その周辺と思われる子どもを主な対象として作成したものである。筆者が保育士として経験した中で日々の保育を手助けするものとして作成した。

2005 年 4 月に施行された発達障害者支援法において、幼児期に発達障害児(LD、ADHD、ASD)を早期発見し、早期支援することが定められた。しかし、乳幼児期に実際に診断を受け支援を受けるには課題が多い。笹森ら(2010)は、以下のような課題を挙げている。①診断は早期であればあるほど不確実性が高く、乳幼児期では発達障害の可能性はあるが確定診断がつきにくい子どもの割合が多い。②保健師や保育の担当者等が発達障害の可能性に気づいても、適切に判断することは難しい。③年少であればあるほど保護者にとっては、障害の受容が困難な時期でもある。④母子保健から始まり、福祉、医療、教育等の関係機関それぞれが断片的な支援になっており、発達段階に応じた生涯にわたる支援になっていない⑤幼稚園、保育所における障害のある子どもへの支援内容や支援体制、幼稚園、保育所に対する専門家や専門機関によるサポート体制が十分に整備されていない。⑥各地方公共団体が整備している社会資源は様々であり、地域による格差も大きい。

また、早期支援に関しても実際にクラスの中の一人として「気になる子」の対応を行う保育士が日々の保育の中で奮闘し、どのように対応すればよいのか悩んでいることも多い。

専門機関に繋ぎ、実際に療育などの支援が開始されるまでのタイムラグや保育所という家庭とは違う場で支援を行うための手助けになるものとして筆者はプログラムを作成し、その際に、「気になる子」に対する保育士の困りや、在籍状況などを探るためにアンケート調査を行った。

II 研究の目的と方法

II-1 目的

平成 25 年に A 市において筆者は支援プログラムを配布した。その際に行ったアンケート調査と、2 年後の平成 27 年に再度同じ内容のアンケート調査を行った結果を合わせて保育所における「気になる子」に関しての実態を考察する。

II-2 方法

平成 25 年 6 月に佐賀県 A 市内の保育所全園を対象に説明会を行い、アンケート調査を配布し、郵送にて回答をもらった。公立保育所 4 園、私立保育所 10 園、計 14 園に配布し、回答があったのは 11 園であった。平成 27 年 6 月に前回回答があった保育所に同じアンケートを再度郵送にて配布し調査を行った。公立保育所 4 園、私立保育所 7 園、計 11 園に配布し、回答があったのは 9 園であった。アンケートは質問紙によるものであり、自由記述も含まれている。平成 25 年の回収率は 78.5%、平成 27 年の回収率は 81.8%であった。

Ⅱ－３ アンケートについて

アンケートは質問紙によるものであり、内容は以下のようなものである。

< はい・いいえで回答 >

- ・現在のクラスに「気になる子」がいる
- ・「気になる子」への対応に困っている
- ・対応方法が分からない
- ・クラスを運営するのが難しいと感じる
- ・自信が持てない
- ・その子（気になる子）のことがよく分からない
- ・その子（気になる子）に対して苦手意識がある
- ・保護者に伝えることが難しい
- ・相談できる同僚がいる
- ・「気になる子」や発達障害についての知識がある
- ・「気になる子」への対応について指導してくれる人がいる
- ・園全体の協力体制がある
- ・加配保育士（補助）についてほしい

< 「気になる」行動はどのようなものか。当てはまる項目に☑をつけて回答（複数可） >

- ・落ち着きがない
- ・じっとしていない
- ・部屋を飛び出す
- ・ことばが出ない
- ・パニックになる
- ・話が聞けない
- ・指示が通らない
- ・集団生活に参加できない
- ・遊びをやめられない
- ・偏食がある
- ・自傷行為がある
- ・他害がある
- ・ボーっとしている
- ・視線が合わない

Ⅲ 結果

１．「気になる子」の在籍状況

現在のクラスに「気になる子」がいるかという質問への回答から「気になる子」の在籍状況が見えてきた。その回答結果を表 1-1 に表す。さらに、年齢別の在籍状況を表 1-2

に表す。

表 1-1 現在クラスに「気になる子」がいる

		実数	%
平成25年	はい	123	76.3
	いいえ	38	23.6
平成27年	はい	98	78.4
	いいえ	27	21.6

平成 25 年（76.3%）、平成 27 年（78.4%）とどちらも高い数値で在籍していると答えている。

表 1-2 現在クラスに「気になる子」がいる（年齢別）

	平成 25 年				平成 27 年			
	はい		いいえ		はい		いいえ	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
0 歳児	1	4	24	96	6	30	14	70
1 歳児	30	83.3	6	16.6	17	70.8	7	29.1
2 歳児	30	83.3	6	16.6	21	80.7	5	19.2
3 歳児	20	100	0	0	15	100	0	0
4 歳児	13	92.8	1	7	9	90	1	10
5 歳児	14	100	0	0	8	100	0	0
3. 4. 5 歳児	8	100	0	0	13	100	0	0
フリー	4	100	0	0	6	100	0	0
不明	3	75	1	25	3	100	0	0

0 歳児担任では、平成 25 年（4%）平成 27 年（30%）と少ない数値であるが、他の年齢になると 7 割以上の保育士が「気になる子」がいると答えている。フリー保育士では、どちらの年も 100%となっており、様々なクラスに入る機会があるフリー保育士という性質からこの数値となったと考えられる。

2. 保育士の困り感

保育士がどのようなことに困っているのか、平成 25 年の結果を表 2-1、平成 27 年の結果を表 2-2 に表す。

表 2-1 保育士の困り感（平成 25 年）

	20代(87人)		30代(25人)		40代(21人)		50代以上(19人)		合計(152人)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
「気になる子」への対応に困っている	39	44.8	18	72	15	71.4	12	63.1	84	55.2
対応方法が分からない	37	42.5	20	80	10	47.6	8	42.1	75	49.3
クラスを運営するのが難しいと感じる	25	28.7	11	44	11	52.3	6	31.5	53	34.8
自信が持てない	26	29.8	10	40	10	47.6	5	26.3	51	33.5
その子(気になる子)のことがよくわからない	26	29.8	13	52	9	42.8	7	36.8	55	36.1
その子(気になる子)に対して苦手意識がある	12	13.7	3	12	3	14.2	2	10.5	20	13.1
保護者に伝えることが難しい	40	45.9	20	80	13	61.9	16	84.2	89	58.5

表 2-2 保育士の困り感（平成 27 年）

	20代(41人)		30代(32人)		40代(26人)		50代以上(23人)		合計(122人)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
「気になる子」への対応に困っている	20	48.7	18	56.2	13	50	10	43.4	61	50
対応方法が分からない	15	36.5	14	43.7	11	42.3	8	34.7	48	39.3
クラスを運営するのが難しいと感じる	26	63.4	9	28.1	10	38.4	6	26	51	41.8
自信が持てない	14	34.1	13	40.6	9	34.6	4	17.3	40	32.7
その子(気になる子)のことがよくわからない	9	21.9	12	37.5	8	30.7	9	39.1	38	31.1
その子(気になる子)に対して苦手意識がある	6	14.6	1	3.1	4	15.3	5	21.7	16	13.1
保護者に伝えることが難しい	18	43.9	18	56.2	10	38.4	13	56.5	59	48.3

“「気になる子」への対応に困っている”は、平成 25 年（55.2%）平成 27 年（50%）とどちらも半数以上の保育士が対応に困ると感じていることが分かった。“保護者に伝えることが難しい”も平成 25 年（58.5%）平成 27 年（48.3%）と高い数値となっている。“対応方法が分からない”は平成 25 年（49.3%）であったが、平成 27 年（39.3%）と大きく落ちている。“保護者に伝えることが難しい”も平成 25 年（58.5%）であったが、平成 27 年（48.3%）と落ちている。

3. 相談・協力体制

園内に相談できる相手がいるか、また、園内の協力体制はあるのかという質問に対しての回答結果が以下である。平成 25 年の結果を表 3-1、平成 27 年の結果を表 3-2 に表す。

表 3-1 相談・協力体制（平成 25 年）

	20代(87人)		30代(25人)		40代(21人)		50代以上(19人)		合計(152人)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
相談できる同僚がいる	45	51.7	25	100	21	100	18	94.7	109	71.7
園全体の協力体制がある	33	37.9	23	92	19	90.4	13	68.4	88	57.8

表 3-2 相談・協力体制（平成 27 年）

	20代(41人)		30代(32人)		40代(26人)		50代以上(23人)		合計(122人)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
相談できる同僚がいる	30	73.1	26	81.2	21	80.7	16	69.5	93	76.2
園全体の協力体制がある	26	63.4	24	75	18	69.2	12	52.1	80	65.5

“相談できる同僚がいる”は平成 25 年（71.7%）平成 27 年（76.2%）と高く、相談相手が園内にいる保育士が多いことが分かった。年度で差はあるものの、20 代保育士が平成 25 年（51.7%）平成 27 年（73.1%）とどちらも平均より低くなっている。50 代以上では、平成 25 年（94.7%）平成 27 年（69.5%）と下がっている。“園全体の協力体制がある”では、平成 25 年（57.8%）平成 27 年（65.5%）と半数以上の保育士が“協力体制がある”と答えている。

4. 知識や指導

「気になる子」や発達障害についての知識があるか、また、「気になる子」への対応について指導してくれる人があるかという質問に関しての回答結果は以下である。平成 25 年の結果を表 4-1、平成 27 年の結果を表 4-2 に表す。

表 4-1 知識や指導（平成 25 年）

	20代(87人)		30代(25人)		40代(21人)		50代以上(19人)		合計(152人)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
「気になる子」や発達障害についての知識がある	13	14.9	10	40	10	47.6	5	26.3	38	25
「気になる子」への対応について指導してくれる人がある	27	31	15	60	12	57.1	8	42.1	62	40.7

表 4-2 知識や指導（平成 27 年）

	20代(41人)		30代(32人)		40代(26人)		50代以上(23人)		合計(122人)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
「気になる子」や発達障害についての知識がある	6	14.6	12	37.5	7	26.9	2	8.6	27	22.1
「気になる子」への対応について指導してくれる人がある	19	46.3	17	53.1	14	53.8	6	26	56	45.9

“「気になる子」や発達障害についての知識がある”では、平成 25 年（25%）平成 27 年（22.1%）と低い。年代別では、20 代保育士が平成 25 年（14.9%）平成 27 年（14.6%）、50 代保育士が平成 25 年（26.3%）平成 27 年（8.6%）と低い数値となっている。“「気になる子」への対応について指導してくれる人がある”では、平成 25 年（40.7%）平成 27 年（45.9%）となっているが、20 代保育士では、平成 25 年（31%）平成 27 年（46.3%）と他の年代より低くなっている。

5. 加配保育士（補助）

加配保育士（補助）についてほしいかという質問に対しての回答結果は以下である。平成 25 年の結果を表 5-1、平成 27 年の結果を表 5-2 に表す。

表 5-1 加配保育士（補助）についてほしい（平成 25 年）

	20代(87人)		30代(25人)		40代(21人)		50代以上(19人)		合計(152人)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
加配保育士(補助)についてほしい	17	19.5	12	48	10	47.6	10	52.6	49	32.2

表 5-2 加配保育士（補助）についてほしい（平成 27 年）

	20代(41人)		30代(32人)		40代(26人)		50代以上(23人)		合計(122人)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
加配保育士(補助)についてほしい	10	24.3	11	34.3	5	19.2	6	26	32	26.2

加配保育士（補助）についてほしいと答えている保育士は、平成 25 年（32.2%）平成 27 年（26.2%）であった。20 代保育士については、平成 25 年（19.5%）平成 27 年（24.3%）と低かった。

6. 「気になる」行動について

「気になる」行動はどのようなものか（複数回答可）という質問に対する回答結果を表6に表す。

表6 「気になる」行動はどのようなものですか？（単位：人）

	平成25年	平成27年
落ち着きがない	97	81
じっとしていない	93	75
部屋を飛び出す	58	56
ことばが出ない	49	57
パニックになる	68	61
話が聞けない	83	74
指示が通らない	83	72
集団生活に参加できない	73	69
遊びをやめられない	62	53
偏食がある	55	50
自傷行為がある	40	39
他害がある	67	50
ボーっとしている	57	59
視線が合わない	75	59

「気になる」行動としては、“落ち着きがない”が平成25年97人、平成27年81人とどちらも最も多い行動であった。次いで、平成25年、平成27年ともに“じっとしていない”“話が聞けない”指示が通らない“と続いた。

7. その他「気になる」行動について（自由記述より）

“少しでも濡れると着替えなくては気が済まない”“痛みに鈍い様子がみられる”など感覚の問題。“数字・日付・時計など覚えていて嬉しそうに話す”など、年齢にそぐわない能力。“体が小さい”“2歳近くになるが歩行ができない”などの発達の問題。“他児に行き過ぎたスキンシップをとろうとする”“ごはんを食べて来ないので空腹で機嫌が悪く、眠いの眠れない”“情緒不安定な子ども”“不安で抱っこを求めることが多い”など、アタッチメントや虐待が疑われるような問題が見られた。

また、“継続して見てもらえる機関がほしい”“巡回相談など子どもを専門家にしっかり

ゆっくり見てもらう環境が充実すればいい”などの記述があった。

IV 考察

「気になる子」の在籍に関しては、平成 25 年（76.3%）、平成 27 年（78.4%）と約 7 割の保育士がいてと答えている。酒井ら（2008）の調査では、61.8%となっており、今回の結果はやや多い数値となっている。年齢別では、0 歳児は平成 25 年（4%）、平成 27 年（30%）だが、1 歳児は平成 25 年（83.3%）、平成 27 年（70.8%）、2 歳児は平成 25 年（83.3%）、平成 27 年（80.7%）、3 歳児は平成 25 年 27 年ともに（100%）、4 歳児は平成 25 年（92.8%）、平成 27 年（90%）、5 歳児は平成 25 年 27 年ともに（100%）となっている。後上（2007）では、配慮児に気づいた時期として、0 歳児の保育中に気づきはじめ、1 歳児、2 歳児、3 歳児と増加していくとしている。保育士は、集団の中で子どもを見ているため、その発達過程でのつまずきや、障害の疑いなどに気づく可能性が非常に高い。後上（2007）は、このことから保育士が乳幼児の正常発達のプロセスを学ぶと同時に障害児、とくに発達障害系の子どもの障害特性について研修することの重要性を、クローズアップしているように思われるとしている。

しかし、今回のアンケートでの結果では“「気になる子」や発達障害についての知識がある”との問いに対して、平成 25 年（25%）平成 27 年（22.1%）とどちらも低く、約 8 割の保育士に知識がないということが分かった。さらに、20 代保育士では平成 25 年（14.9%）平成 27 年（14.6%）、50 代保育士は平成 25 年（26.3%）平成 27 年（8.6%）となっている。発達障害や「気になる子」ということが盛んに言われるようになったのは最近のことであるから、50 代保育士に知識がないのは当然であるように思われるが、最近資格を取得したばかりのはずである 20 代保育士に知識がないというのは、驚きであった。このことは、保育士を養成する課程において、発達障害や「気になる子」に関する基本的知識、支援方法などを十分に学ぶ機会を設ける必要があることを示唆している。

また、A 市では年に 2 回程度全保育所が集まり研修などを行っており、さらに、各園では月に 1 度園内研修を行っている。この中で、「気になる子」や発達障害について学ぶ機会もある。それに関わらず、「気になる子」や発達障害についての知識があるとの回答は少なかった。このことから、A 市で行われている研修内容等を再度検討する必要があるということが言える。菅原ら（2014）の調査結果では、具体的な対応方法等の研修を行うことは参加者のモチベーションを高めるためには必要となる。しかし、支援力を底上げしていくためには、短期的に目の前の子どもに生かせると感じなくても、長期的によりよい支援につながるような、態度や知識、技術をバランスよく伝えていくことが必要とされているとしている。さらに、キャリアや立場により、困難や研修ニーズも異なることが明らかになっており、よりキャリアや立場に即した効果的な研修の在り方を検討すること等が今後の課題となると述べている。A 市でも、「気になる子」や発達障害に関しての研修を行う際に、キャリアや立場、保育士の年齢などにグループを分け、それぞれに必要なと思われる内容の研修を行うことや、自由記述にもあったように専門家による丁寧な指導が必要であると考える。例えばケース検討を定期的に行う、同じ専門家による巡回相談とスーパーバ

イズなど、具体的な支援に結びつくような研修も必要なのではないだろうか。

保育士の困り感に関しては、平成 25 年、平成 27 年でやや数値が違うものの“「気になる子」への対応に困っている”“保護者に伝えることが難しい”がどちらも約半数以上の保育士が「はい」と答えている。“「気になる子」への対応に困っている”という保育士は、20 代保育士より 30 代・40 代保育士に多いということが分かった。これは、保育士の経験を積んでいく中で、様々な場面で気付きを持つようになることや、保育所という施設の特徴として複数の保育士でクラスを持つことが多く、中堅となり自分が中心になってクラスを運営する中での責任感などが関連しているのではないかと考えられる。また、“保護者に伝えるのが難しい”という保育士が多いのは、現場にいた筆者も実感として感じていたことである。大学コンソーシアム佐賀（2014）の調査でも、保育所・幼稚園の担任への質問の中で、発達障害の可能性のある子どもの保護者対応で難しいと感じていることでは“伝え方”が 63.6%と最も多かった。今回のアンケートの自由記述にも“「まだ幼いから」となかなか受け入れてもらえない”“保護者が理解してくれない”などが挙がっていた。乳幼児という特性もあり、「もう少し待てば」「まだ小さいから」などなかなか保護者の理解を得られないと悩む保育士は多い。しかし、筆者が療育相談や保育所で接した保護者との会話の中から、はっきりと自覚して気づいてはいなくても、何か違うなと感じており、自然と子どもの特性に合わせた関わりをしていたという例は少なくなかった。保護者がなかなか受け入れてくれないその裏にある気持ちに焦点を当て支援を行う必要があるのではないだろうか。

また、“対応方法が分からない”が平成 25 年（49.3%）であったが、平成 27 年（39.3%）と大きく落ちていた。同じように“保護者に伝えることが難しい”も平成 25 年（58.5%）であったのに対して平成 27 年（48.3%）と大きく落ちていた。これは、「気になる子」に対してどのような対応をしていく必要があるのか、どのように支援を行えば「気になる子」が過ごしやすくなるのかということ保育士が分かっているならば、保護者に対しても子どもの様子を伝えやすくなるということが言えるのではないだろうか。このことから、保育士養成課程での学びや、現場での保育士の研修等の在り方を検討することの重要性が示唆される。

相談・協力体制に関しては、“相談できる同僚がいる”平成 25 年（71.7%）、平成 27 年（76.2%）とどちらも高い数値になっている。しかし、年代別に見てみると 20 代保育士では平成 25 年（51.7%）平成 27 年（73.1%）と平成 27 年になると数値は上がっているもののどちらも平均より低い。このことから、同じ職場で情報を共有できる相手がいらない 20 代保育士が 2 割以上もいるということが見えてくる。さらに、この数値に比例して“園全体の協力体制がある”も 20 代保育士では平成 25 年（37.9%）平成 27 年（63.4%）となっている。このことから、相談できる同僚がいないと感じている保育士は、園全体の協力体制もあまりないように感じているのではないかと考えられる。同僚に相談できないということは、「気になる子」に関しての情報を園全体で共有できていないということになるため当然といえば当然である。丸山ら（2008）は、研究会での実践報告の困難として、「保育士自身が意見を持っているにもかかわらず、その意見を出さない（出せていない）のではないか」「実践報告に対して出された意見に圧倒されるのか次の報告者が出にくい」という二点を挙げている。このため、批判的な意見、相手の非難しか出し合えない場にならな

いようにしていく必要があると述べている。若く経験年数が浅い保育士が孤立せず、日々の保育や「気になる子」について安心して相談できる。園全体でその子について自由な意見を出し合い、全保育士でその子の支援ができる環境作りが必要であると考ええる。

“加配保育士(補助)についてほしい“については、平成 25 年(32.2%)平成 27 年(26.2%)という結果であった。3 割近い保育士が加配(補助)についてほしいと思っているということだが、逆に考えるとクラスに「気になる子」はいるが加配(補助)が必要なわけではないと考えている保育士が 7 割ほどであるということになる。今回の調査から、「気になる子」への対応に困っている保育士は多いということが分かっている。困っているが、加配(補助)は必要ではないということは、やはりクラスの中の一人として「気になる子」を支援していく方法を保育士は求めているということが考えられる。阿部(2006)は、子どもを支援していく際に個別のアセスメントだけでなく、クラス全体のアセスメントが重要である。その子を変えるよりも、まずクラスの人的環境や物理的環境を調整することの方が、はるかに効果的な支援となる場合があると述べている。保育士も目の前の子どもの対応に困ってはいるが、感覚的にクラス全体を支援していくことが重要であると感じているということではないかと考える。そうであるならば、この感覚的なものを明確にし、どのように支援を行うことができるかということを考えていくことが重要である。

V まとめ

今回のアンケートから、クラスに「気になる子」がいる保育士が約 7 割おり、その子への対応や保護者に伝えることに対して難しいと感じていることが分かった。さらに、発達障害や「気になる子」に関しての知識にも自信がない保育士が多く、「気になる子」への気づきはあるものの、その次の行動へ移るための学びが必要であるということが示唆された。また、相談できる同僚がいることが園全体の協力体制にも影響してくるということも見えてきた。

これらのことから、我々、保育士養成校に求められることも見えてきた。発達障害や「気になる子」に関しての基本的知識や具体的な支援方法、保護者対応について養成課程の中で学ぶ機会を十分に用意すること。また、職場の中で情報共有できるような関係づくり、困った時にすぐにヘルプを出すことができる力を身に付けられるような学生生活を送ること。そのための環境づくりを我々保育士養成校が行っていく必要があるのではないだろうか。また、専門家として現場と連携を取り、研修やスーパーバイズ等の支援を行っていくことも求められていると考える。

VI 引用・参考文献

1. 阿部利彦 (2006) : 発達障がいを持つ子の「いいところ」応援計画, ぶどう社
2. 大学コンソーシアム佐賀 (2014) : 「佐賀県内の幼稚園・保育所等における発達障害の可能性のある子どもへの支援に関する調査」報告書
3. 藤井貴子 (2012) : 保育で気になる子どもたち—なかまづくりの保育をめざして—, かもがわ出版
4. H原口英之・野呂文行・神山努 (2015) : 幼稚園における特別な配慮を要する子どもへの支援の実態と課題—障害の診断の有無による支援の比較—, 障害科学研究, 第 39 巻, p 27-35
5. 本郷一夫・飯島典子・杉村僚子・平川久美子・平川昌宏 (2010) : 「気になる」子どもの保育と保護者支援, 建帛社
6. 久保山茂樹・齋藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳 (2009) : 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査—幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言—, 国立特別支援教育総合研究所研究紀要第 36 巻, p55-76
7. 黒澤礼子 (2008) : 幼児期の発達障害に気づいて・育てる完全ガイド, 講談社
8. 丸山美和子・野村朋・増本敏子・山本弥栄子・丸山美和子 (監修) (2008) : 保育現場に生かす「気になる子ども」の保育・保護者支援, かもがわ出版
9. 大越和美・西舘有沙・西村実穂・水野智美 (編著) 徳田克己 (監修) (2012) : 具体的な対応がわかる 気になる子の保育 発達障害を理解し保育するために, チャイルド社
10. 後上鐵夫 (2007) : 乳幼児期からの一貫した軽度発達障害者支援体制の構築に関する研究—乳幼児期における発見・支援システムの実態調査を中心に—, 国立特別支援教育総合研究所, 調査研究報告書
11. 酒井均・大元千種・宮平喬 (2008) : 保育の中で「気になる子」と保育士養成校における課題—福岡県下の幼稚園・保育園の実態調査より—, 筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報, 第 19 号, p 35-42
12. 笹森洋樹・後上鐵夫・久保山茂樹・小林倫代・廣瀬由美子・澤田真弓・藤井茂樹 (2010) : 発達障害のある子どもへの早期発見・早期支援の現状と課題、国立特別支援教育総合研究所研究紀要第 37 巻, p 3-14
13. 菅原航平・泉万里江・中島範子・川上泰彦・立川小雪・宮本絵美・菅原亜紀・楠佐知子・内田郁代・川邊浩史 (2014) : 発達障害児支援に関する保育者のニーズ・困難・能力について—佐賀県内の幼稚園・保育所に対する質問紙調査の結果から—, 日本発達心理学会第 25 回大会論文集, P
14. 藤後悦子 (2010) : 気になる子どもはどのような子どもか : 徳田克己・田熊立・水野智美編著 : 気になる子どものガイドブック はじめて発達障害のある子どもを担当する保育者のために, 福村出版, p 19-24